源太ヶ岳雪崩事故報告書

（岩手医大山岳部パーティ）

2002 年 1 月 13 日発生

八幡平源太ヶ岳東斜面における表層雪崩

源太ヶ岳雪崩事故対策委員会

発刊に際して

岩手医科大学山岳部は、1928年岩手医学専門学校の創設後まもなく、その第１期、第２期生を中心として活動を始めました。爾来70余年、200名をこえる部員が岩手、東北、日本そして海外の山々を舞台に登山を行って来ました。

1950年頃から夏の北アルプスの合宿が恒例となり、やがて早春の岩手山合宿がそれに加わり、冬の岩手山も対象となってきました。さらに部員たちは、玉山（台湾）、シャー・イ・アンジュマン（アフガニスタン）、アラスカ、ララガリ（チベット・ヒマラヤ）、カナディアンロッキー、フィトゥン（モンゴル）、アクサイ（中国・中部崑崙）と海外遠征を経験してきました。

そして、この度、山岳部の歴史のなかではじめて事故報告書をまとめることになりました。

堀口正治先生は、1985年11月１日、岩手医科大学医学部解剖学第１講座教授に就任されました。1987年ころより、山岳の学生とともに、須川岳、駒ヶ岳、乳頭山、裏岩手の山やまをスキーで登られ、冬の裏岩手山スキー合宿もはじめられました。やがて山岳部長に就任され、冬のスキー登山の山域を奥羽山脈から北上山脈へと拡大し、精力的に部員とともに活動されました。1994年3月、山岳部長を退任されましたが、学生の冬の山行には積極的に参加され、山岳スキーの指導をなさっておられました。そのなかでの2002年１月13日の雪崩事故でした。

2002年３月、岩手医科大学山岳部OBと現役部員の代表で構成される「源太ヶ岳雪崩事故対策委員会」が正式に発足し、同年６月、本報告書の刊行が決定されました。そして、関係各位の努力と秋田谷英次先生のご協力により刊行のはこびとなりました。

この報告書を堀口教授のご霊前におそなえし、ご冥福をお祈りしますとともに、このような一大痛恨事の再発を防止するために役立つことをのぞんでおります。

おわりに、今回の雪崩事故につきまして、多くの方々のお世話になりました。おくれましたが、関わっていただいた方々の御尽力に厚く御礼申し上げます。

平成17年１月

源太ヶ岳雪崩事故対策委員会代表
前岩手医科大学山岳部長
利　部　輝　雄

はじめに

この事故が発生した行動要因と環境要因を明らかにし、雪崩事故の回避と雪山の安全登山の一翼を担うことを最大の目的にこの報告書を著した。事故の最大の原因は雪崩に関する認識の欠如である。そしてまた、おそらく世の多くの登山者が陥っていると思われる、「根拠のない安全性を疑っていない馴れ合い」の危険性を強調したい。

最初に事故概要をインターネット上で公開したのは事故後１ヶ月を経ない2002年２月上旬であった。事故を少しでも早く報告し反省点を述べ、世の登山者に同様の事故を未然に防いでもらうことが急務と考えたからである。今回、報告書を出す運びとなり、事故後我々の集めた乏しいデータを基に秋田谷英次先生に雪崩の考察をして頂いた。先生の考察は広く雪崩事故の防止に役立つと思う。先生には2003年１月の時点で原稿を頂いたが発行が大幅に遅れたことにお詫びを申し上げる。

また、ここで、今回の雪崩事故に関わって頂いた全ての方々と、多くの方からのご厚情に改めてお礼を申し上げたい。未だ失礼している方があればそれは全て我々の不徳でありお詫び申し上げる。

堀口教授は幼少から山に親しんだ。麻布高校、東北大学、北海道大学在学中は山岳部で活動し、日本アルプスや日高を初めとする冬山を堪能した。岩手医科大学教授就任後は山岳部員らと冬の八幡平、岩手山、秋田駒、八甲田に通った。一方で近隣の無名の山も愛した。念願としていた冬の和賀岳も二度目の挑戦で頂上を踏んだ後は家族で夏に登るのを楽しみにしていた。ライフワークである解剖学と山にひとかたならぬ情熱をそそぎ、そして家族に愛を抱いていた。学生には正面から向かい合った。如何なる時も正義を曲げなかった。その姿こそが、純粋な情熱こそが学生や人との間に真の絆を結んだ。冬山では率先してラッセルした。

源太ヶ岳は堀口教授が好きだった山である。麓の松川温泉を発しブナ林を辿るとやがて岳樺に変わりそしてオオシラビソ帯になる。このころから源太東面の美しい無木立の斜面が見え隠れし、さらにその斜面を登れば頂上に至り一面に樹氷原が広がる。ここは既に広大な八幡平の一角でありたおやかな峰々が続くのである。

事故後幾度となく源太ヶ岳に登った。行くたびに山は美しい。堀口教授は今もテレマークで山々を駆け回っているようである。

平成17年１月

黒　瀬　　顕
武　田　三十郎
村　瀬　邦　崇

岩手医科大学山岳部

源太ヶ岳雪崩事故報告書

目　次

発刊に際して
はじめに

【第一部】事故の報告と考察

Ⅰ．岩手医科大学山岳部の冬期活動
Ⅱ．今回の登山
　1．登山の計画
　2．行動記録
Ⅲ．事故後の入山
Ⅳ．雪崩の詳細と考察
　1．事故後の調査による雪崩の規模
　2．雪崩現場の写真
　3．雪崩前後における各自の記憶
　4．参考写真
　5．雪崩についての考察
　6．行動についての反省と考察
　7．その他参考事項
Ⅴ．お世話になった方々
Ⅵ．参考（この遭難を取り上げている記録）

おわりに

【第二部】八幡平付近でみられた雪崩の写真

【第三部】源太ヶ岳雪崩事故所見　　秋田谷　英　次

【第四部】堀口正治先生追悼文　　近　藤　　孝
平　泉　　宣
西　尾　文　彦
秋　山　康　夫
阿　部　郁　夫
前　田　孝　夫